

今日の説教のポイント<エフェソの信徒への手紙3章14~21節>

①神様に向かって祈れる恵み！

「こういうわけで、私は御父の前にひざまずいて祈ります」(14)。神様に祈れるということは、「どんな時にも自分は孤独ではないのだ」と思えるということです。孤独ではなくなる、これは私たちの人生にとって大きな恵みです。でも、パウロはどのように目に見えない神様の存在をこれほど確信して祈れるようになったのでしょうか。「こういうわけで」と言い、パウロはその理由を直前で語ってきました(3:1-13)。自分が迫害していた復活の主イエスに捕えられたからでした！この時からパウロは孤独ではなくなったのです。自分の罪を赦し、周りの誰よりもいつもどこでも共にいて下さるお方、そして私たちを導いて下さるお方を知ったからです！祈るという行為は、祈る相手が存在していなければ意味ありません。祈るからには、本気でその存在するお方に向かって祈る。そんなお方を知った恵みを覚えたいと思います。

②キリストによる愛を知ったなら、その愛に根ざして生きよ！

パウロがここでエフェソの人たちのことを思って一番力を込めて祈っているのは、「愛に根ざし、愛にしっかり立つ者となる」(17)ことです。それはパウロがキリストの愛を知ったからであり、よって、神様に、「彼らもその愛を知ることができるように」と祈っています(18-19)。他のどんな幸いを与えられるより、この神様の愛を理解した者となれるように祈っているのです。どんなに迫害を受けても、どんなに見下されても、迫害し見下したその相手のために注ぎ続けたイエス・キリストの愛を知る時、この愛を持つことの強さ、大切さが分かって来るのです。

③神様が私たちの内に働いて下さる。そのことを祈るなら必ずなる！

今日の箇所、パウロは始めから終わりまで神様に向かって、「あなたが聖霊なる神として彼らに働きかけ、キリストの愛を知らせて下さい」と祈っています。ただ私たちに「頑張れ」とだけ語りかけるようなことはありません。私たちがなすべきこと、なせることは、ただキリストの愛を理解したいと思って取り組むことです。その時に、神様が必ず私たちを理解に導き、変えて下さるからです。教会は、それに取り組んで神様に栄光を帰することが託されている者達の群れなのです(20-21)。